

リンゼイの道德思想

岩 村 太 郎

I

リンゼイの名は、日本においては余り一般的には知られていない。アレキサンダー・ダンロップ・リンゼイ (Alexander Dunlop Lindsay) は、一八七九年にスコットランドのグラスゴーに生まれたイギリスの政治哲学者である。そして一九五二年に没するまでの間、オックスフォード大学のベイリオル・カレッジの学長、そしてオックスフォード大学の副総長、後のキール大学となったノース・スタッフォードシャー大学の初代学長などの要職に就いていた。さらに以上のような大学人としてだけでなく、労働組合運動にも係わり、そしてイギリス労働党への貢献が認められて男爵位が与えられている。

リンゼイは政治哲学者として「近代デモクラシー」および「近代デモクラシー国家」を徹底的に擁護した思想家であると結論づけてよいであろう。第二次世界大戦中、特にドイツのナチズムに対して敢然と戦いを挑み、イギリス国营放送を通じて反ナチズム、反ファシズムの演説をしたことはヨーロッパではよく知られている事実である。それは「私は民主主義を信ずる」と題され、一九四〇年というまさにヒットラー全盛期に勇敢にもリンゼイが行動を起こしていたことは、単に研究室にこもっていただけの学者ではなかったことの証左である。どれほどの勇気が必要だったであろうか、ナチス秘密警察の魔の手がどれほど恐ろしいものであったかは、今からは想像もつかないことである。

けれどもリンゼイは決して単に楽天的に近代デモクラシーを奉じていたわけではない。その思想の根底には、ピューリタンとしての深い信仰と、ピューリ

タンとしてのしっかりとした道德意識があったのである。リンゼイはキリスト教の聖職者ではなかったが、大学での日々の礼拝などで自己のキリスト教信仰について語る機会が与えられ、その中で自らの信ずるところを公の前で語っていたようである。リンゼイは自己の道德観と宗教観、そして政治哲学者の立場を全て一つの人格の中で統合しながら自己の思想を形成していったのである。

本稿の目的は特にリンゼイの「道德思想」の分析検討にある。その宗教観の検討は別の機会に譲るとして、ここではリンゼイのもっていた基本的道德思想がいかにして形成され、いかにして発展し、さらにこの道德思想を根底から支えていたものに言及してみたい。合わせて日本ではまだ余り馴染みのないリンゼイという一人の思想家を、ここでとりあげ紹介してみたいと思う。近年ようやく盛り上がってきた日本におけるリンゼイ研究のためのガイドラインとなれば幸いである。

II

どのような思想家にも、その思想家固有の思想的枠組みのようなものがある。そしてこの枠組みを正確に知ることなく、正確に思想全体を分析することは全く不可能であろう。リンゼイにもこの枠組みが、はっきりと存在していた。金科玉条のごとく、あるいはまた信念に近いほど守られるべき絶対に譲れない掟があったのである。ここではリンゼイのもっていた思想的枠組み、思想的原理について言及してみたい。

リンゼイの主著が『民主主義の本質¹⁾』であることは、全く疑いの余地がないであろう。イギリスのデモクラシーとピューリタニズムについての、歴史的であると同時に政治学的な研究書である。面白いことにその「第二版への序文」の中に、実に要領よくまとめられているリンゼイの言葉があり、この言葉を踏まえておくことはリンゼイの思想全体を見渡す時の手がかりとなるのである。

さて、この講演の主たるテーゼは次のように述べることができよう。討論が民主主義の基本をなすものであり、民主主義的機構の目的は各人の意見の相違を表明することであり、民主主義は公認されその活動を奨励され

た反対党を必要とすること、寛容の原理は民主主義にとって不可欠の条件であること、そして最後に、民主政治は民主的で非政治的な共同社会を意味するような民主的な社会においてのみ成功しうるものである、ということなどである。これら全てを貫く重要な含蓄については、次のように指摘できよう。民主主義にあつては、政治は第二義的な事柄であること。というのは、国家の強制的機構の目的は、自発的で非政治的な諸活動のなかにその根源的活力をもつ共同生活を保護し、調和させたりすることだからである²⁾。

デモクラシーの本質に属することがらを、リンゼイは主に五つあげていることが分かる。そしてこの「第二版への序文」が書かれたのが、一九三五年であるという事実に注目してみたい。時あたかもドイツとイタリアにファシズムが勢いを増し続けていた時期であり、さらにロシアも共産党による一党独裁の支配が公然となされている時であることを念頭に入れておきたい。まさにこの時にリンゼイが「民主主義の危機」を強く感じていたのであった。

リンゼイのあげている五つの条件とは、それぞれがデモクラシーの本質を成すものであり、次に思い切ってその五つを要約してみたい。

- 1) 討論が民主主義の基本。
- 2) 各人が意見の相違を表明できること。
- 3) 反対党が必要。
- 4) 寛容の原理。
- 5) 民主的で非政治的な共同社会を意味する民主的社会。

以上の五つの諸条件とは、リンゼイが絶対に守ろうとし、絶対に不可欠であると考えたものなのであった。すなわち以上の諸条件に当てはまらない社会は民主的ではないと考え、さらにもし以上の諸条件を成立させることを阻む勢力があるならば、リンゼイは正々堂々と非難し、あるいは積極的に反撃を加えるのであった。

リンゼイはある意味で非常に「おとな」であった、と言ってしまうと余りに

も単純すぎるが、少なくとも「成熟した人間」、「成熟した社会」を理想としていたのである。各人の意見が根本的には違ういうことを大前提にして、妥協すると簡単に片づけるのではなく、あくまでも民主的に相手との関係を維持し続けること、これがリンゼイの目指すデモクラシーなのであろう。リンゼイはさらに続けて次のよう述べている。

それゆえ、全体主義国家と民主主義との間にはいかなる妥協もありえない。人間を組織化する上でのこのふたつの方法、つまり、人間をできる限り均一なものにして満場一致させる大衆説得と、各人の意見の相違に活動の余地を与えるような共同計画を討論によって発見してゆくこと、このふたつの対照についてはこの講演の第二、第三章で検討されている。しかしながら、国家社会主義のその後の挑戦は、この対照をさらにいっそう増し強めたのである³⁾。

全体主義国家に対して民主主義陣営が対峙するという当時の世界情勢を考えれば、当然の発言であると考えられることもできようが、それはあくまでも現代の視点からの評論にすぎない。二つの勢力が向かいあうそのまっただ中であってこそ歴史的発言は意味をもつのであり、やはり以上のリンゼイの主張は今日においても耳を傾けねばならないものであろう。

ファシズムとは、リンゼイに従うならば、自己と他者との、つまり自分と相手の意見の違いを認めないことである。相手との関係のこじれは暴力によって解決が可能である、と考えるのもファシズムである。「成熟した関係」を目指すリンゼイにとって、ファシズムなどとても許せるものではあるまい。いくら「寛容の原理」を掲げるリンゼイであっても、これ以上妥協はできないのであった。

リンゼイにおいては、決して道徳観が即リンゼイの政治思想観に結びつけられていた訳ではないが、リンゼイが徹底的にデモクラシー、厳密には近代デモクラシーの擁護にまわっていた点をこれまでに押さえておきたかった。十七世紀にまでその根をさかのぼるリンゼイのデモクラシー擁護の立場は、近代においてますます徹底したものとなっていったのである。

Ⅲ

リンゼイの研究者としての名声が、『民主主義の本質』の出版によって確立されたことは事実ではあるが、決してこれだけが全てではなかった。故国であるスコットランドのグラスゴー大学で学び、オックスフォード大学のユニバーシティ・カレッジで学び、再びスコットランドに戻ってエディンバラ大学のフェロウをつとめ、そして再びオックスフォードに戻ってベイリオル・カレッジのフェロウもつとめている。特にベイリオルに戻ってから、その初期には古典学のチューターとして学生指導を担当している。イギリスの名門大学において、あるいはヨーロッパの名門大学において「古典学」を担当することの意味は、日本では考えられないほど重いのである。古代のギリシア・ローマ研究を任せられることは名誉なことであると同時に、責任重大な地位に就いたということに他ならなかった。

リンゼイの際立った業績としては、ギリシア語で書かれたプラトンの『国家』を英訳したこと、それは『プラトンの共和国』として英語圏に住む人々に広く読まれたものであり、リンゼイの隠れた代表作と言ってよいものであろう。そしてフランスにおける「生の哲学」の提唱者であり、物質的なものに対して生の自由で創造的進化を根源的なものとみなしたベルグソンについても、リンゼイは一時期深い関心をよせていた。『ベルグソンの哲学』として出版されている。さらに、この点が最も重要であると思われるが、リンゼイは倫理学の大家であるカント研究者でもあったという事実である。リンゼイはカントについての著作と研究論文をいくつか残している⁴⁾。残念ながら邦訳されたものが現在のところないため、リンゼイによるカント研究は日本においては全くと言ってよいほど一般には知られていない。

リンゼイはカント研究の著作の中で、まずカントの自伝的研究から始めて、カント思想全般を紹介することに腐心しているようであるが、これも決して単なるドイツ語から英語への書き直しというようなものではなく、十分にカント研究書として通用するものであった。特にカントの倫理学についてのリンゼイの読み込みの深さと、基本的にはカントに同調するリンゼイの倫理的構えについては、本稿の目的にも直接関係があるために、後に詳しく論じてみたい。

さらにこれらに関連することとして、リンゼイがグラスゴー大学において

「道徳哲学(moral philosophy)」の講座を担当していたという事実を忘れてはならない。世界的に知られているアダム・スミスも同様に道徳哲学を担当していたことから分かるように、イギリスにおいてこの講座を担当することは大変な名誉であると言ってよいであろう。特に道徳哲学とは、狭義の道徳哲学を指すものではなく、広義の、つまり学際的な意味での道徳哲学を指すものであって、本当の意味での広い知識が要求され、それに応えうる人のみを担当を許されるのであった。現在のように各学問領域が細分化されすぎてしまった傾向の中では、むしろ考え難いことかもしれないが、けれどもこれが本当の意味からの道徳哲学の在り方であり、現代のわれわれが反省すべきことではないだろうか。二年間という時間を長いととらえるか短いととらえるかは別として、リンゼイが道徳哲学を担当していたこの二年という期間⁵⁾のもつ意味は、非常に大きかったと言えるのである。

プラトンの古典研究から始まって、ベルグソンの生の哲学に関心を示し、そしてカント哲学を確実に吸収していったリンゼイの学問的軌跡、これら一つ一つが不可欠の要素として、リンゼイのデモクラシー擁護の立場へと発展していったと考えられる。アイデアを前提としながら、そのアイデアとの対比によって現実を把握しようとする、ある意味では理想主義的なプラトニズムを身につけたリンゼイ。ベルグソンに触発されたと考えられる、論理や言葉の一步手前に存在する人間の生の躍動と生の飛躍。この点からリンゼイは眼をそらさなかったために、リンゼイ独特の人間味あふれる発想を保ち続けることができたのであろう。カントによる影響は決定的である。プロテスタンティズムに堅く立つカントとリンゼイは、基本的な世界観は共有していたと言えるであろう。

以上、これらの諸思想が幾重にも重なってリンゼイの思想は固まっていった。そして近代デモクラシーの徹底的擁護という、一つの明白な境地が生まれたのである。プラトン、ベルグソン、カント、そして近代デモクラシー、それぞれの糸が一つとなって結ばれていったと考えてよいであろう。

IV

リンゼイの道徳思想をとらえる時に、特にカントとの関係を見ておく必要がある。この二人の間には、余り知られていない事実があったのである。リンゼイ

イをより深く知るために、次に引用してみたい。

しかしながらリンゼイとカントの関係を見る上で、次の一点を見逃してはならない。すなわちカントの祖父がスコットランド人であったという点である。カントの祖父は十七世紀の末に、海を渡って誇り高きスコットランドの地から大陸に渡って来たのである。つまりカントの中には四分の一のスコットランドの血が入っていたのである。ヨーロッパの歴史を広くながめるならば、そのルーツを他国に求めることは決して珍しいことではないけれども、それがイングランドでもアイルランドでもない、まさにスコットランドであったことこそが重要な意味をもつのであった。すなわちその同じスコットランドのグラスゴーにおいて、一八七九年にリンゼイ自身も生まれているという事実である。カントの祖父がスコットランドのどの都市に生まれたのかについての資料は筆者のところにはないのでこれ以上分からないが、少なくともリンゼイとカントがそのルーツを共有しているという事実については、覚えておかなければならないであろう。現在の日本においては「イギリス」と言って全く一つに考えてしまうけれども、当時は、そして現在もイギリスはイングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズとして、精神的にも文化的にも全く相独立した国々の総称なのである。リンゼイとカントに見られる共通のルーツ、この点を確認しておきたかった。何らかの心情的な結びつきをリンゼイはカントにもっていたかもしれない⁶⁾。

リンゼイとカントの接点は、だいたい以上の通りである。しかしこれはあくまでも本人の意志を超えた部分であって、上述の指摘だけにとどめておきたい。ただしリンゼイ研究の一助となれば幸いである。

リンゼイは『カント』という、カント自身とカント哲学の紹介を目的とした書物を残している。一つ面白いことは、この『カント』の中の一部分は、リンゼイがエディンバラ大学で講義をした時の、その準備ノートが元になっているということである⁷⁾。非常に平易に『カント』が書かれている理由は、ここにあるのであろう。

V

道徳思想および倫理学を語る上で、カントの名前をあげない者はいないであろう。天上にある星空と、わが内なる道徳律、この二つを胸に刻みこみながら思索を続けたカントの功績は、誰の眼にも明らかである。リンゼイの道徳思想をとりあげる時、カントのそれと比較するとより一層分かり易くなると思われる。

一般によく知られている通り、カントは「自由」、「靈魂の不死」、そして「神の存在」という三つの大きな命題を解こうと試みた。形而上学的な意味での永遠のテーマに、カントは正々堂々と挑んだのである。哲学者であるカントがこのような試みを企てたことは、当然であるかのように思われてはいるが、逆に言うと、証明する必要があったということである。つまり、自明ではないがゆえにそれを証明しなければならなかったのである。たとえば原体験として神の存在を実感し、その結果強い信仰をもった人にとっては、神の存在など証明する必要もないし、哲学者や神学者に論証していただく必要もない。証明の試みとは、以上のようなものであろう。

さてリンゼイは、当然のことながら、カントの打ち立てたこれら全ての理論を熟知していた。そしてカント哲学および倫理学について、実際に大学で講義していたのである。カント哲学の最も重要な部分を、思い切ってここで要約するならば、それは次のようなものになろう。自由、靈魂の不死、そしてとりわけ神の存在を証明することなどは、理論的には不可能である。けれども理論理性に対して実践理性の優位を説くことによって、理論理性によって一旦は否定されたものを、実践理性によって救い出す、あるいは蘇らせた、とこうなるのである。カントによる神の存在の「道徳的要請」として知られているものである。カントに対して余り好意的でない人々は、かなりの皮肉をこめて、カントは一度倒れてしまった木を、支え木をすることによって救い出してしまった、などと言うのである。

ここでリンゼイとカントの違いは、明らかである。社会科学をその主たる学問領域にしているリンゼイにとって、その関心や学問的方法論がカントとは質的に異なっていたことはむしろ当然のことであろう。すなわちリンゼイは、カントと同様に堅くプロテスタンティズムの上に立ちながらも、神の存在を形而

上学的にも倫理的にも証明することはしていない。もっとも宗教やキリスト教の果たした役割を、近代史の中で詳しく論ずることはあっても、神そのものの存在についてはむしろ疑う余地のない、自明のこととしてリンゼイは理解していたのではないだろうか。

近代デモクラシーを形成する中で、キリスト教の果たした役割とその意味については考察を加えたリンゼイであったが、カント的な仕方での神の存在研究については、リンゼイは全くと言ってよいほど関心を示さなかった。ただし繰り返しになるが、リンゼイがカント哲学もカントによる神の存在証明も、そのどちらをも熟知していたことは記憶しておくべきであろう。

リンゼイは文章や書物としては残さなかったものの、カントによって道徳の意味について、とりわけ神の存在について、その両方を支えるべき論拠のようなものを獲得していった、と結論づけられるのではないだろうか。憶測が若干入っているとは言えるものの、それほど的はずれな結論ではないように思われる。

VI

第二次世界大戦中の一九四〇年、英国国营放送であるBBCにおいて「私は民主主義を信ずる」という題で、リンゼイは反ナチズムの立場を内外に明らかにしたことは以前にも述べた。しかしながらこの放送の約五年ほど前に、すなわち『民主主義の本質』の「第二版への序文」の中で、リンゼイは次のように書いている。

一九二九年になされたこの講演以来、わたくしたちは一九三一年の世界規模の経済恐慌やそれにつぐナチ革命を目撃してきている。ナチ革命はドイツの新しい民主主義〔ワイマール憲法体制〕について本書一九ページに記されている文章を悲しくも時代遅れのものにしてしまった。経済恐慌は、戦後〔第一次大戦後〕の民主主義に厳しい試練をもたらし、新しいヨーロッパの民主主義国はたいていそれに屈してしまった。しかし、イギリスと、さらにはるかに印象深いことにアメリカが、民主主義政府は危機を生き抜くことができるということを実証した。民主主義の研究者にとって

のナチ革命の主な教訓は、ドイツはドイツ人がもつ一徹さで民主主義にとって代わるものの本体を暴露してしまったということである。ファシストの国イタリアも、ボリシェヴィストの国ロシアも、すでにわたくしたちをして全体主義国家について語らざるを得なくさせたが、イタリアもロシアも、国家社会主義国ドイツのような残酷さで全体主義国家の意図するものを実現したのではなかった⁸⁾。

リンゼイは経済的には世界恐慌を実際に体験し、さらに政治的にはファシズムの台頭を経験している。その中でもリンゼイの批判の矛先は、ナチス・ドイツに最も鋭く向けられていることが分かる。一九三五年の九月に書かれたものであることから、この「第二版への序文」の中で示されたリンゼイの言葉は、まさに歴史的なものとして現在評価されるべきであると思われる。道德思想そのものとは言えないであろうが、広い意味でのリンゼイの正義感と倫理観を示すものであり、貴重な資料となりうるものである。

VII

リンゼイの道德思想だけをとりあげようとする試みには、そもそも少々の無理があることは分かっている。けれども、それをあえて本稿でとりあげた目的は、やはりリンゼイがカントに対して並々ならぬ関心を寄せていたという事実には他ならない。そしてリンゼイが道德哲学の講座を担当していたことも忘れてはなるまい。

リンゼイがカントという一人の哲学者を、ヨーロッパ哲学倫理学史の中で、どのように位置づけていたかを知る、実に分かり易い文章が残されている。

近代科学のこうした特徴は今日では明白であるとはいえ、長いあいだ感知されませんでした。実際、イギリスの経験主義者たちは、「新しい学問」の実験と直観の側面を強調し、総じて数学的な要素を正当に評価しそこなったので、認識と臆見の古来の区別を乗り越えることには完全に失敗しました。この「新しい学問」の営みと方法を正しく理解した最初の人はいまヌエル・カントその人です。

カントは『純粹理性批判』の序文で、科学の本道に達した数々の探求について語り、さらに進んで、そうした探求の方法を問い、形而上学がそれを以て範とする可能性を探っていきます。しかし、それが書かれている数段落で最も特徴的なことは、科学の指標は自明で絶対確実な定理ではないというカントの仮定です⁹⁾。

「新しい学問」とリンゼイが呼んでいるものとは、一体何を指すのであろうか。「新しい学問」と、余りにも単純に表現されてはいるものの、特にこの言葉の意味は、ヨーロッパの認識論上の問題としてとらえなければならない。

周知の通り、カントは「コペルニクスの転回」によって、ヨーロッパの認識論を根底から履したのである。カント以前の認識論とは、それはイギリス経験論 (empiricism) と大陸合理論 (rationalism) という二つの対立軸でとらえられるものであった。意識が先か、あるいは対象が先か。「生得観念」はあらかじめ与えられているのか、与えられていないのか。このような対立の中で、人間は元々は何も与えられていない白紙の状態であって、経験することにより全てが与えられ、人間は自ら獲得することにより自己形成をする、と結論づけたのがイギリスで伝統的に考えられた経験論哲学である。一方、フランスを中心とする大陸合理論とは、人間は生まれもった「生得観念」をもち、この観念が一切の始まりである、と考えていた。

このような図式的対立を止揚した哲学者がカントであり、これはヨーロッパ認識論哲学の歴史の中で、決定的な意味をもつものであり、一つの大きな転換期であったのである。カントの結論を短くまとめるならば、それは次のようになる。われわれが知りうることは、われわれのもつ認識方法にしか基礎づけられない。つまりわれわれは自己のもつ認識の仕方までしか実際のところ分からない、というものであった。認識対象を問うというよりも、認識の仕方、認識の構造そのものを問うということ、すなわちこれがカントによる「コペルニクスの転回」なのであった。ここではもはや、生得観念の有無などは、直接的には問題とされていないのである。

リンゼイが呼ぶ「新しい学問」とは、まさに理性的認識と不確実な認識である臆見との間にある曖昧な区別を乗り越える、初めの一步のことなのであった。

科学の限界と、人間理性の限界というこの二つの限界に気づいたカントによって初めて真の認識論 (epistemology) が確立された、とリンゼイは結論づけている。

リンゼイが考える、この正しい認識論の上に立ってカントはその道德思想を打ち立てていった。古代ギリシアのプラトンにまでさかのぼることも、またピューリタニズムに注目することも、そのどちらもリンゼイ研究にとって欠かせない視点ではあろうが、ここでは近代認識論の出発点を、リンゼイがカントに求めていたことだけを指摘しておきたい。

VIII

リンゼイの道德思想を成立させたその根本動機が、キリスト教とカント倫理学であったことは、以上で明らかであろう。しかしながらキリスト教とカント倫理学を、リンゼイは社会という実践の場へと応用したのである。すなわち近代民主主義社会の中で、守るべきものと捨てるべきものをリンゼイは正しく識別しようとしたのであった。「分かる」ことは「分ける」ことから始まるように、近代民主主義の中での本当の自由を分かろうとした人こそリンゼイであると言えよう。「真理はあなたたちを自由にする」という聖書の言葉は、まさにリンゼイへの贈る言葉のようでもある。

余りにも漠然とした道德、倫理学という言葉の研究する時に常に忘れてはならないことの一つが「自由の問題」である。道德と倫理学にとってこの自由との関係性が、まさにその生命線であると筆者には思える。すなわちわれわれ人間は歴史という時間の流れの中で、果たしてどこまで自由でいられるか、どこまでの欲望を満たしうるか、という根源的な問いの意識である。この一点を欠いてしまうならば、そもそも倫理学など無意味である。なぜならば、そこには何らのストッパーが働かず、人間はただ盲目的自由に溺れていけばよいこととなり、つまり反省する必要のない生き方を選べばよいこととなるのである。道德と倫理学を成立させる究極的な問題意識が「自由」への問いであること、これは筆者にとっての堅い信念である。さらに人間が社会的存在がある以上、個としての自由は必然的に互いが自由であることをも保障しなければならない。そしてその社会同志も自由であり続ける必要がある。個と社会という二つ

の視点から、あるいは個と集団という二つのカテゴリーから論じて初めて自由の分析はなされるべきであろう。

自由と表裏一体をなす責任と義務の意識、この意識こそが終生変わることのないリンゼイの根本動機であり、それは倫理学に携わる人間全てに共通する大前提であろう。しかしながらさらにその根底に、キリスト教の神への信仰があった。倫理学と言っても、例えばサルトルやニーチェなどのように神や信仰を排除した上に成り立つ場合も多い。そしてこの傾向は現代においてはますます顕著なのである。生命倫理学や環境問題を論じる上で、現代流の神なし倫理学はどこまで可能であるのだろうか。やはり神の前で善か悪か、人間の視点だけではなく、神の前での視点というものをわれわれはもう一度復権させるべきではないか、と筆者も本気で考えている。このような意味からも、リンゼイはこの根本をはずしてはいない。もっともリンゼイが生きていた時代には、現代のわれわれが取り組まなければならないものと全く同じ生命倫理学や環境問題が存在していた訳ではないけれども、視点の置き方の確かさについては、全く疑う余地がないのである。このことはリンゼイについても、そしてカントについても全く同じであろう。

「真理はあなたたちを自由にする」と言う時に、ここには人類永遠のテーマが示されていることにわれわれは気づくであろう。真理ではないものによってものが裁かれる時、そこには隷属が始まる。テイリツヒ流に言うならば、自律でなく他律となるのである。自由を得るために本気で研究し、本気で行動に出たリンゼイのことを、そしてリンゼイの勇気を、われわれは決して忘れてはならないのである。先ほども述べた通り、無神論的倫理学がすっかり定着してしまった現代において、もう一度リンゼイは見直されるべきであると思う。そして必ずリンゼイの道德思想は、現代に貢献するはずのものであり、さらに未来へも続くべきものである。

IX

本稿においては十分には論じきれなかった諸問題が当然のことながら、われわれには残されている。ここではリンゼイの道德思想の中の、特に倫理的課題についていくつか指摘しておきたい。そしてこれらを筆者への学問的課題とし

て受けとめてみたい。

まず、政治的側面を見る限り、リンゼイが生きた時代と同じように世界各国に、いまだ独裁政権が存在していること。そしてそこでの不当な人権抑圧が行われていること。一方では、いくつかの共産主義国家が旧ソ連を筆頭にして、割合と早く崩壊したこと。これらの政治の流れは、リンゼイが思っていた通りではなかったようである。けれどもまだヨーロッパ型の民主主義が完全に勝利を収めている訳でもない。民主主義の本質は現代において、一体どうあるべきなのであろうか。

次に、現代における科学技術の急速な進歩により、リンゼイの想像をはるかに超えた問題が発生してきている。その一例が生命倫理学や環境問題であり、社会科学を専門とするリンゼイといえども見逃すことはできないと思われる。人間のもつ科学技術に、人間の意識がついて行けなくなったとも考えられるし、またその技術の独り歩きに対する倫理的判断が現代において混乱しているとも言えるのである。

さらに付け加えるならば、フェミニズムの問題などがあげられようが、ここでは以上の問題の指摘だけにしておきたい。神の眼前において、絶対的という視点を持ち続けていたリンゼイにとって、全ての問題が道徳的、倫理的な問いであったはずである。ならばわれわれはもう一度リンゼイを深く読むことによって、まさに上述した現代の問題を解く鍵が与えられるのではないだろうか。リンゼイがもっていた根本精神を現代に生かすこと、これがわれわれに残された使命であろう。

X

ヨーロッパ的民主主義を成立させる時に、その根本を十七世紀のイギリスにおけるピューリタニズムにまでさかのぼって分析をしたリンゼイ。そしてリンゼイの残した『民主主義の本質』は、やはり不朽の名著であると言えよう。しかしながらさらにその根底には、リンゼイが堅くもつプロテスタントの信仰と、カント的な意味での義務意識あるいは責任意識が同時に備わっていたのである。近代民主主義社会の中での市民としての義務、この精神によってリンゼイの行動も、そしてリンゼイの学問研究も説明されるべきであろう。リンゼイが

単に研究室にこもって思索した思想家ではなく、かのバートランド・ラッセルもそうであったように、積極的に現実社会に対して発言をした人だった。この精神こそ、われわれがリンゼイから学び、受け継がなければならないものであろう。

リンゼイの著作は、法学部の学生にとって必読の書であると一般に言われるが、倫理学そしてヨーロッパ近代史を学ぶ者にも全く同じことが言えると思う。なぜならば、神と人との間にある絶対的な縦軸関係を正面に見すえながらリンゼイは思索した。プロテスタンティズムやカント哲学を学ぶ以前に、リンゼイはこの縦軸を自己の内にもち、それは終生揺らぐことはなかった。リンゼイの道德思想と倫理思想を追求することの意味は、やはりこの点にあるのであろう。

註

- 1) A. D. Lindsay, *The Essentials of Democracy*, London, University Press, 1929. 永岡薫訳 [増補]『民主主義の本質』、未來社、1992年。(以下『本質』と略す)。
- 2) 『本質』、3頁。
- 3) 『本質』、3頁。
- 4) 現在入手可能で筆者の手許にあるものをここに三つ挙げておく。*The Philosophy of Immanuel Kant*, London, Dodge Publishing Co., 1913. *Kant, Leaders of Philosophy Series*, London, Ernest Benn Limited, 1934. “Kant’s Account of Causation”, *Proceedings of Aristotelian Society*, 1909.
- 5) 1922 – 24年。
- 6) 拙論「リンゼイとカント——実践理性の優位をめぐって——」『イギリス・デモクラシーの擁護者 A. D. リンゼイ——その人と思想』永岡薫編著、聖学院大学出版会、1998年、108 – 109頁。
- 7) A. D. Lindsay, *Kant, Leaders of Philosophy Series*, London, Ernest Benn Limited, 1934, p. 5.
- 8) 『本質』、2 – 3頁。
- 9) A. D. Lindsay, *Religion, Science and Society in the Modern World*, Oxford University Press, 1943. 渡辺雅弘訳『自由の精神』、未來社、1992年、64 – 65頁。